

## 父母の法要「本当の自分に気づかされて」

大和町 野田 恵光

昨年私は、父親の十七回忌と母親の七回忌法要を勤めました。年忌を経るにしたがって、私のなかで父母の存在が、よりはっきりしていく感覚があります。折に触れ、あるいは何気ない日常のなかで、ふと親の言葉や姿が思い浮かぶことがあります。最近も境内を散歩中に父親の言葉が胸をよぎりました。

「おまえもこの年になればわかる」。もう三十年以上も前のことです。ささいなことで父親と口論をし、自己主張に終始したあげく、その勢いで生き方をも否定してしまいました。その時に父親が発したのが、「おまえもこの年になればわかる」でした。今にして思えば、聞く耳を持たず自分の都合ばかり、あまりにも乱暴で未熟、申し訳ない気持ちでいっぱいです。亡くなってやっと気づく尊い存在。年々に深まっていく親の言葉に、ただ頭が下がるばかりです。私を南無阿弥陀仏に気づかせてくださる善知識の存在とは、こういうことなのだと感じています。

ところで、私達が法要に出遇うということはどんな意味があるのでしょうか。親鸞聖人の次のことばが浮かんできます。『歎異抄』第五章に、「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。」とあります。親鸞は、亡くなった父母への供養のために念仏したことは、いまだかつて一度もない、と言われていています。初めてこのことばを聞かれた方は、一瞬戸惑うのではないのでしょうか。孝養とは亡き両親に対する追善供養のことです。世間では一般に供養を、生きている者が、亡き人を想う情愛の表れと考えています。親のためにお経を読んでもらい、法要をつとめる私の善根が亡き人の幸せにつながると思って手を合わせる。その心情をよく現しているが葬儀の弔辞です。「安らかにお眠りください」、或いは「冥福をお祈りします」の言葉だと思います。これは、とんでもない勘違いですね。亡き人は生きている者が供養して安らかにしてやらねばならない存在なのではないのでしょうか。私達が念仏をして、自らの善根で亡き人を幸せにする。そんなことができますか?そんな力が私達にありますか?それは明らかに生きている者の傲慢です。

親鸞聖人は、念仏を「自分の努力で行える善行」としているという思い違いに対して、「両親の供養のために念仏したことは、いまだかつて一度もない」と私達に投げかけられたのです。

親鸞聖人は、人間の「有り様」をどこまでも自己中心の存在である「罪惡深重の凡夫」と表現されました。諸仏となられた父母は、そんなわが身の真実を鏡のごとくに写し気づかせてくださいます。私達はまちがいなく「いのちのつながり」のなかであり、亡き方を縁として今を生きています。法要は、そんな諸仏に導かれて、本当の自分に出遇う大切な聞法の間です。